

青年期研究 2.0 —問題意識と研究デザインのブレーク・スルーとは—

司 会 : 若松 養亮 (滋賀大学)
話題提供者 : 岡田 努 (金沢大学)
河野 莊子 (名古屋大学)
平石 賢二 (名古屋大学)

企画趣旨

研究を重ねてくると、その事象が解明された感覚をもつ一方、なかなかすっきりとしない感覚がぬぐえないものです。青年はみな、こういう気持ちでいるのか、あてはまらない人もそれなりにいるのではないかな…。本当にこの変数が効いているのか、それと相関する“まがい物”を掴まされているのではないかな…。もっとすっきりした類型がないかな…。そうしたもどかしい部分を新しい問題意識と研究デザインで打ち破り、「もう一歩上」に行くには、どんな視点や研究デザインが有効なのでしょう。

そこでこのラウンドテーブルでは、中堅の会員3名の方々に話題提供をいただき、新たな研究の切り口や暫定的な成果、今後の展望などをお話しいたします。同じ領域の研究テーマに関心をもつ方はもちろん、そうでない方も自分のテーマに置き換えてお聴きいただくことで、きっと新奇な視点や研究デザインが見えてくることと思います。

現代青年像と青年心理学

岡田 努 (金沢大学)

ブレークスルーなどという大きなタイトルを頂き、正直戸惑っている。これまで現代の青年の対人関係と自己の関連について模索してきたが、正直まだまだ道半ばであり、企画趣旨にあるような「もどかしさ」のまっただ中にある。

研究テーマに「現代の」とついているように、青年のあり方について「時代」の要素が否応なく関係してくる。時代とともに青年の姿も変わってくる。しかし表面に現れた姿だけではとらえきれない。内的過程においてはどうか？ということも当然視野に入れなければならない。また「時代」との関連でいえば、たとえば社会学における若者論研究などとの共同は大きな意味を持つだろう。(昨年度も学内の社会学研究者との共同でそのようなシンポジウムの開催に関わることができた)。

一方こうしたテーマの中には、青年を見る研究者や大人の視点、青年観も関わってくるだろう。たとえば今の若者は「おとなしく、内向きである」という嘆きが、教育界や政財界からしばしば聞かれる。しかし「活発で外向き」であることが一様に望ましい性質なのか？(経済活動に貢献する「人材」としてという限りでは、確かに望ましいのかもしれないが)。しかし時代のニーズが変われば大人が望ましいと考える「青年像」もまた変化していくだろう。そして、このような大人の側の期待や視線によっても、青年は影響を受けるだろう。こうした大人の期待と青年の意識や行動との相互の関連などについて研究が進められれば、きっと青年心理学はまた一歩前進するのかもしれない、と大きな夢ばかり描いている。

非行少年研究の奥深さ—社会に還元できる研究をめざして— 河野 莊子（名古屋大学）

私は、学部生の頃に、非行少年の心理に興味を持ち、以来、時間的展望や自己効力感、セルフコントロールなどの概念を用いて、研究を進めてきました。

非行研究の枠組みがドラスティックに変化したのは90年代に入ってからのことです。それまでは、多くの研究者が「人はなぜ非行をするのか」という問いのもと、その原因を見つけようとしていました。もちろん、この手法は現在も有効ですが、近年、「人はなぜ非行をしないのか」を考えようとする潮流が生まれたのです。「人はなぜ非行をするのか」という問いと「人はなぜ非行をしないのか」という問い。一見正反対になっただけのようですが、前者は「非行少年は非行をしない少年と比較して何が違うのか」を探るもの、後者は「非行をしないためには何が必要か」「同じ環境にいても非行をしなくてすんでいる人にはどのような能力が備わっているのか」などを探るものと言い換えることができるでしょう。問いの立て方がシフトしたことで、これまで単に比較の対象でしかなかった「非行をしない人々」を、より積極的に、生き生きとした人間としてとらえようとする姿勢が、研究者側に生まれたように思います。

非行や犯罪は、誰かを深く傷つける行為です。だからこそ、研究は社会に役立つものであるよう、私たちは努力すべきです。臨床心理学的な視点だけでなく、発達心理学も社会心理学も認知心理学も融合して、少年たちの行動を理解し、支援できるような新しい理論的枠組みを見出せないか、これから考えていきたいと思っています。

親子関係研究の領域から

平石 賢二（名古屋大学）

学部生の頃から数えると既に30年以上研究に従事してきています。この間にどのような研究上の「ブレイク・スルー」があったのか、あまり自覚はしていませんが、研究テーマや研究対象が年齢を重ねるにつれて少しずつ変化してきたのは確かです。

私が青年期の親子関係研究に取り組み始めたのは助手になってからです。先行研究をレビューし、最初に注目したのは、H. D. Grotevant と C. R. Cooper らが提唱した individuality と connectedness の概念に基づく individuation model でした。彼らの研究は、親子の言語的相互作用を直接観察し、発話の機能を分析して、上記の概念的枠組みの中で、親子の関係性をとらえるものでした。私自身が行ったのは、行動観察法をそのまま踏襲した研究と、この概念的枠組みを面接法や質問紙法を用いてさらに他の問題に応用、発展させるという試みでした。Grotevant らは、親子関係を青年の心理社会的発達を促進するための1つの「社会的文脈」として位置づけていました。しかし、私は実際に多様な親子の相互作用を観察する中で、親自身の発達課題に対して関心を抱くようになりました。また、青年にとっての親という視点と同様に親にとっての青年という視点が重要であること、親子関係は一方ではなく双方向に影響を与え合う「相互性」の関係として理解する必要があるという考えを強めました。さらに、親子の間を結びつける「間主観性」の問題や、親子の関係性が双方の経験する様々な変化の中でどのように相互調整されていくのか、そのダイナミックなプロセスに関心を持つようになってきました。大会当日はこのような研究上の視点のシフトについて具体的な研究例も紹介しながらお話ししたいと思っています。